

思い出すことども

平 田 渡

口腹の愉しみ

ひとの心につづく道は胃の中を通っている、という名言を吐いたのは、稀代の食通であった作家、開高健にほかならない。

もう何年になるか定かではないが、七子先生（日頃、福井先生のことを親しみをこめてそう呼ばせていただいている）とおいしいもののやり取りをするうちに、しみじみそう思うようになった。

わたしは、恥ずかしながら、知る人ぞ知る、少年の頃からの釣り好きである。今でも一年じゅう、家のバルコニーから見える明石海峡周辺の海に船を出し、旬の魚を追いまわしている。イカナゴを食べて脂が乗った冬から春にかけてのメバルと桜鯛、滋味掬すべき初夏の明石ダコ、全身がトロ状態になる真夏のマアジ、青みがかった眉をはいたような女王然とした美しさの秋のアオリイカ、お造りがうまい夏から冬にかけてのタチウオ、そして、きわめつけが初冬に訪れる淡路島南端の幻のイシダイ、以上が主な釣りものなのだが、昨今はクール宅急便のおかげで、どんな魚もあくる朝には、日本全国津津浦浦の食卓まで届けることが可能になった。

そんなわけで、わたしが釣行した翌日の七子先生の食卓には、ぴちぴち、とれとれの新鮮な魚が並んでいるというわけである。もちろん、お届けする魚の下ごしらえはすんでいるので、先生には姉上とごいっしょにお刺身にしたり、煮たり、焼いたり、酢のものにしたりしていただくだけでいいのは言うまでもない。

いっぽう、わたしが七子先生からお返しにいただくものは、エビで鯛を釣るという言葉がぴったり当てはまるように思える。

たとえば、粒よりのほのかに甘い初夏のサクランボ（佐藤錦）、ふつうでも美味だけれどブランドをかけると甘みが増して絶品に変わる夏の静岡メロン、メキシコものを^{ひいき}にしたいけれど、ととてもとても太刀打ちできない別格の宮崎マンゴー、手間ひまかけて育てられた冬の蜂蜜入りりんご、柑橘類の香りとおいしさがぎゅっと詰まった肥前佐賀のデポコン、といったぐあいである。

ほかに、姉上がわざわざ京都・桂離宮そばまで足を伸ばされ、買い求めてこられる中村軒の麩饅頭。そして、これは一年じゅう、しょっちゅう頂戴するので、わたしの活力源となっている天五は魚伊の上うなぎ弁当を挙げなければならない。伝え聞くところでは、朝のうちに先生自らお店まで出向かれ、お昼前に研究室までお届けくださっているとか。むろん、温かいもの

を食べさせようのご配慮によるもの。

さらに、折にふれて、梅田近辺から北新地界限にかけて、和洋中のレストランに招待をうけることもある。いちど、第一ビルの神仙閣でひらかれた新年会では、ドン・ペリニョン（ブリュット）、同（ロゼ）を含めて、何時価 17万円相当のシャンパーニュをふるまわれ、度肝を抜かれた。わたしは生来、下戸なのだが、美酒はいくら飲んでも悪酔いしないことを、そのとき実感した。たしかに微醺を帯びただけけれど、きちんと佳肴に舌鼓を打つことも忘れなかった。

七子先生が避暑に出かけられる由布院の常宿、玉の湯の別棟暮らしの話が聞かされると、そもそも住んでいる世界が違うと思ひ知らされるけれど、先生の話は単なる自慢話で終わることはまれである。では、今度、いちど行ってみようか、という方向に発展することが多い。ただし、玉の湯は、タクシーですぐ行ける距離ではないので可能性はうすいが、ひょっとしたらと思わせるところが七子先生なのである。

ことほどさように、七子先生とおつきあいをしていると、口腹の愉しみにあずかれるので、ますます美味礼讃の気持ちが高まってくる。おそらく、退職してからも、そうした食を通しての繋がりに変わりはないであろう。

クラブ活動の流れに棹さす

文学部に25年、外国語機構・外国語学部には16年、合計41年、非常勤講師時代3年を含めると、44年にわたって関西大学に勤めてきた。大学は2016年に創立130周年を迎えたので、ほぼその3分の1に当たる。

専任講師になってまもない頃、柴山了一先生の後任として、学術研究会・スペイン語研究部の顧問を引き受けた。

文学部には、スペイン語スペイン文学科はなかったもので、このクラブを準学科のように見立てていた。したがって、今から考えると、若気の至りとしかいいようがないけれど、むりを承知で比較的に高水準のクラブ活動をおこなうようにしていた。たとえば、スペイン語による暗唱大会や弁論大会はまだしも、語劇祭まで手を伸ばしていたのだから驚きである。

弁論大会はクラブ活動の中心を占めていた。まず、二年生以上全員が日本語による原稿を作成したあと、顧問の査読をへて、和西辞典だけを頼りにスペイン語訳に挑んだ。出来のほどは想像にお任せするが、そのあとの添削を割りふりするのが大変であった。とうてい専任二人だけでは手が廻らない（最盛期には40～50名の部員がいた）ので、心苦しいことながら、非常勤講師のご助力を仰ぐことになった。

すったもんだの末にスペイン語文ができあがると、今度は暗記と発音練習である。こうなると、出講いただいていた京都外大のアントニオ・カベサス、関西外大のフェリペ・カルバッホ、同マヌエル・ブルネットといったネイティブの先生方の出番であった。ご指導をお願いするうちに、しだいに発音が様になっていった。

夏休み前に、OBとOGを招いての学内弁論大会がおこなわれた。その中で選抜された数名が、秋に天理大学と京都外大で催される全国大会に出場することができた。

両大会の日には、ほとんどの部員は応援に出かけたし、顧問のわたしも審査員として招かれたので同行した。結果は、おおむねつぎのような講評を受けることが多かった。すなわち、「関西大学の出場者は、スペイン語が第二外国語であるにもかかわらず、善戦されました」。そうした常套句はいつも虚しく耳に残った。優勝までの道のりはじつに遠かった。

けれども、腐らずにやっているうちに、京都外大の大会で優勝者が出た。経済学部3年生だった大浦公一君が、関大生初の偉業をなしとげてくれたのである。

彼は、のちに三和銀行（現東京三菱UFJ銀行）に就職し、マドリードやバルセロナの支店長を勤めることになった。マドリード駐在の頃は、ちょうどわたしが在外研究員としてアルカラ大学に派遣されたときと重なった。おかげで、ありがたいことに、マンションの手配、電気やガス会社との契約などに手を尽くしてくれた。また、バルセロナ時代には、サグラダ・ファミリア教会の正面ファサード「生誕の門」の彫刻を担当した、外尾悦郎氏、それにのちに助手になった大竹志歩さんに引きあわせてくれた。何でも、外尾氏から中央の三枚の門扉（2015年末ぶじ完成）を作る費用を日本企業に打診する役を仰せつかったらしいが、そのとき以来の知り合いだということだった。外尾氏とは同じ福岡県出身ということで話が弾んだ。起工以来144年目、ガウディ没後100周年に当たる2026年の教会完成が待たれるところである。

閑話休題、何より忘れられないのは、クラブが関西スペイン語学生連盟主催の語劇祭に初出場して初優勝を飾ったことである。もっとも、わたしはこの慶事には深くは関わっていない。演劇は専門外なので、指導はその道に造詣が深い非常勤講師、鬼塚哲郎氏（現京都産業大学教授）に、初めからお願いしていたのだ。すべては、まだ若かった鬼塚先生の熱心な指導と、それに応えるだけの器量をそなえた部員の努力の賜ものだったことはまちがいない。

スペイン語研究部は、これまでに二度ほど廃部の危機にさらされながらも、現在も活動中である。二回目のときは、OB会の資金援助のもとで新入部員に五大特典（①スペイン料理レストランへの招待。②「地球の歩き方 スペイン編」プレゼント。③スペイン旅行者には3万円の補助。④スペイン語検定受験者には検定料4千円の補助。⑤「秀」や「優」がとれる補習授業の実施）を与えることにしたら、何と35名の入部希望者が押しかけ、うれしい悲鳴をあげることになった。クラブはいま、創部60周年を祝う行事をおこなう時が近づいている。

文章力をみがく

永年、スペイン語の授業を担当してきた。

それだけに、文学部国文科の関谷俊彦先生から、法学部の〈文章論入門〉の授業担当をお願いできませんか、という話が舞いこんだときは新鮮な気持ちでした。どうやら、スペインやラテンアメリカの文学作品を日本に紹介する翻訳の仕事をしていることをご存知だったようだ。

最初は、てっきり理論について講義するものだばかり思っていたが、じつは、新入生向けの文章作法のイロハを教える実践講座だったのである。

それには当初、受講生数が40から50名と多いのにびっくりした。しかしやむをえない。谷崎潤一郎『文章讀本』(中公文庫)を教科書にして、春学期のあいだに自己紹介(200字)、随筆(400字)、小論文(800字)を書いてもらうことに決めた。三種類の文章は、わたしが完成と見なすまで何度も朱を入れて、書き直しをさせることを原則とした。したがって、学生による原稿の作成と修正、それに教師による添削が、果てしなくというのは大げさだけれど、幾度となくくり返されることになった。

原稿用紙の使い方も知らない学生が混じる中、まず教室で自己紹介を書かせた。それぞれの生年、出身地、性格の長所、将来の希望進路について取り上げるように伝えた。くれぐれも、暗く湿っぽい内容ではなく、明るいさわやかな印象をめざすようにとも言った。

この段階では、まだ学生はあまり気乗りがしていない。自分の文章に朱を入れられた経験がない学生は、反撥こそすれ、あまりいい気持ちがないのが表情から見てとれる。けれども、字数制限があるので、むだな言葉を削ぎ落としていくうちに、文章がきりりと締まってくるのが何となく分かるのだろう、「ふむ、なるほど」とぐらいは思い始めるにちがいない。

身辺雑事をあつかう随筆では、どうしても学生はありきたりの、誰もが知っているようなことを主題にしがちである。そこで、芥川賞作家、村田喜代子『名文を書かない文章講座』(朝日文庫)や、井上ひさし『日本語観察ノート』(中公文庫)を引きあいに出して、文章の基本は、「自分にしか書けないことを誰にも分かるように書くこと」だと伝える。そして、思いついた題目についてメモをとることを勧める。

学生は随筆の主題を決め、文章を書きあげたあと、一、二回、手直しを受けた頃から、しだいに乗り気になってくる。というのも、講評つきで真っ赤になって返ってきた原稿を清書するうちに、おのれの文章が目に見えて改善されてゆくの分かり、晴れ晴れとした心地よさのようなものを覚えるからであろう。こうなればしめたものである。学生の方が積極的になってくるのである。

小論文のテーマは、内外の政治、経済、文化、社会問題である。たいていの学生は、新聞や週刊誌はおろかテレビのニュースも見っていないので、現在、関心のあるテーマは何かありますかと訊いても、芳しい答えは返ってこない。そこで、天声人語や、昨今の目ぼしい社会問題を取りあげた新聞記事切り抜きのコピーを渡して、その中からテーマを選ばせ、関連のある資料を集めるように指示することになる。

小論文の場合は、文章を書かせることと同様、国内や世界で起きている時事問題に関心を持つように仕向けることが重要である。

これはよくある話だったけれど、小論文を書く段になっても、まだ自己紹介も随筆も手直し中の学生がいた。とうとう三種類の文章に同時に相対しなければならぬ売れっ子作家並みの

状況に追いこまれ、まさにてんやわんやであった。

一応の完成を意味する「良」マークをもらうまで、ひとり平均、各ジャンルごとに四、五回は提出したように憶えている。

それでも、学生は文章を書く端緒についたばかりにすぎない。あとは、読書を通してさまざまな名文にふれながら、文章を書く回数を増やしていくしか方法はない。

ついでながら、2010年、冬季バンクーバー・オリンピックのフィギュア・スケートで日本男子初のメダリストに輝いた高橋大輔君は、文学部のスペイン語Ⅰ、Ⅲを受講した頃、すでに有名だったので教えた記憶がはっきりと残っている。

いっぽう、2015年、小説『サラバ!』で直木三十五賞を受けた西加奈子さんは、わたしが法学部の〈文章論入門〉を担当したほぼ十年のあいだに入学しているはずだが、当時、無名だった彼女が受講生だったとすれば、わたしは、今ではベストセラー作家になった西加奈子さんの育て親になるわけだけれど、残念ながら彼女の名前は脳裡に刻まれていない。

すまじきものは宮仕えとはいい条

2002年から2016年にかけて、東西学術研究所の〈訳注シリーズ〉として以下の五冊の翻訳を出すことができた。版元はいずれも関西大学出版部である。

- ① アレッホ・カルペンティエール『エクエ・ヤンバ・オー』2002
- ② ラモン・ゴメス＝デ＝ラ＝セルナ『グレゲリーア抄』2006
- ③ ラモン・ゴメス＝デ＝ラ＝セルナ『乳房抄』2008
- ④ マルセリーノ・アヒース＝ビリヤベルデ『聖なるものをめぐる哲学 ミルチャ・エリアーデ』2013
- ⑤ ラモン・ゴメス＝デ＝ラ＝セルナ『サーカス』2016

①は、東西学術研究所（以下東西研）がまだ、現在、博物館が入っている簡文館の一階にあった頃に上梓したもの。あれは、大学の中でもいちばん趣きがある建物だった。天井が高く、がっしりとした、西欧風の石造りを思わせる内部構造が落ち着いた雰囲気をかもし出していた。夏はひんやりと冷たい空気が快かった。重厚な感じの扉をあけると、正面に事務所があり、左手奥が所長室、廊下を挟んだ向かい側に、研究例会がひらかれる会議室があった。当時の〈訳注シリーズ〉の担当は田中文子氏であった。

①の表題「エクエ・ヤンバ・オー」とは、キューバ在住の黒人が話すアフリカ系のことば、ルクミ語で「神の御名の讃えられんことを」を意味する。ちなみに、この神はキリスト教の神ではなく、ゾンビで知られるヴードゥー教の神にほかならない。作者は、亡命先のパリでシュルレアリスムの洗礼をうけて帰国した作家、アレッホ・カルペンティエールである。作品は、

作者若書きの処女長篇小説に当たる。

それまで翻訳を出す場合、原稿を出版社の編集者に送れば、あとは解説を書き、校正をするだけでよかったけれど、今回は大学から出すので、勝手にまるで違った。

担当の田中文字子氏に翻訳を渡したあと分かったのだが、東西研から出る本は、すべて上質紙が使われ、ハード・カバー製本であった。それは願ってもない嬉しいことだったが、装訂をどうするかは訳者のわたしに任されていた。表紙の色は好きな黄緑を選んだ。いちばんの問題は表紙カバーの体裁だった。

小説の舞台は、首都ハバナから離れた、サトウキビ畑が広がる田舎なので、サトウキビ畑の写真を使うことを思いついた。そうした写真は、今ならインターネットで探せば簡単に手に入るにちがいないが、当時はそうはいかなかった。

そこで広告会社に勤めている弟に相談すると、鹿児島県中種子町の総務課広報・統計係の日高敏隆氏を紹介してくれた。日高氏のご好意により、青く澄み切った空に白い雲が浮かんだサトウキビ畑の写真でカバーを飾ることができた。

そのときまでに出した翻訳には、帯が必ずついていたので、今回もあるものと思っていたが、予算に計上されていないとの話であった。いわゆる腰巻きのない表紙カバーは、学術書には珍しくないけれど、一般書の場合は何とも物足りない感じである。ふと、だったら帯がついているように見せる工夫をすればいいのでは、と考えた。その結果、肌色の帯もどきの部分に緑色の文字で「アレホ・カルペンティエール 魔術的な黒人の社会を描いた処女長篇小説」という惹句を入れることにした。

のちに、この作品は、NHKドラマ番組部・オーディオドラマ班からFM放送のラジオ・ドラマにしたいので、翻訳者の許可がえたい、些少ながらギャランティー、それに番組を録音したCDを進呈させていただきます、との申し出があった。快諾したのはいうまでもないが、もしあの帯もどきがなかったら、放送局ディレクターの目に留まったかどうか疑問である。

これには後日譚がある。NHKの方で、カルペンティエールの現在の著作権所有者の行方をたどられたのだが、けっきょく途中で所有者が誰なのか分からなくなったのである。それで話はあっけなくお流れになってしまった。

②のときも、帯の予算はついていなかったけれど、若い頃パリに留学し、ピカソと並んでキュビズム画家として鳴らした、メキシコ人画家、ディエゴ・リベラが描いた、作者ラモン・ゴメス＝デ＝ラ＝セルナの斬新きわまる立体的な肖像を表紙カバーに使った。リベラは、母国に帰ってから、シケイロスとオロスコとともに三人で民衆のための壁画運動を推進する一方、自画像ばかりを描いた強烈な個性をもった女流画家、フリーダ・カーロと結婚した人物である。フリーダは、夫リベラが浮気癖があったのに対抗して、メキシコ亡命中だったロシア人革命家トロッキーや、日系アメリカ人の彫刻家・画家のイサム・ノグチと浮名を流した。

③のときから、東西研は児島惟謙館に移り、担当も田中文字子氏から奈須智子氏に、出版社な

らぬ印刷所も、ナニワ印刷 (①) と高速オフセット (②) から遊文舎 (③④⑤) に変わった。

それとともに、初めて帯に予算がついたので、そのぶん遊文舎の西澤直哉氏 (ついでながら俳優の江口洋介似の好男子) に相談しながら、装訂のプランを練る時間が長くなった。

③は上質なエロティシズムをたたえた作品だったので、表紙カバーには、パリ時代にリベラと親交のあったアメデオ・モディリアーニの手になるデッサンの裸婦像を採り入れた。正直な話、大学から出す本にヌードを載せることには、ためらいなしとはしなかったけれど、そんなことを心配していたら、ゴヤの『裸のマハ』以降のヨーロッパ近代絵画の重要なモチーフについて語ることはできなくなると思い直した。

そして、帯には、波打ったかたちの柔らかい線を描いてもらい、そこに横書きで次のようなキャッチ・フレーズを書き入れた。

「われこそはスペインのアポリネールなるぞ、と言わんばかりの気概に燃えるラモンの、パリ仕込みのアヴァンギャルド精神が横溢する、世界に比類を見ない、まるごと一冊、乳房の本」。

現在は全国に展開するジュンク堂書店の発祥の地は、神戸三宮のセンター街にある店舗だが、③はその翻訳小説コーナーに、5年ほど平積みのかたちで陳列されるという幸運に恵まれたが、売れゆきはそんなに伸びなかったと仄聞している。

④は、10年以上の永い準備期間をおいて取りかかった代物である。というのも、日頃から学生に理屈をこねる文章を書いてはいけな、つねに具体的に書くようにと指導してきた張本人が、世界の宗教史をめぐって書かれた、理詰めの本の翻訳を試みる仕儀になったから頭の切り換えに時間がかかったのだ。もともと哲学的な内容が性に合わないのである。

ではそもそもなぜ、マルセリーノ・アヒース=ビリャベルデ氏 (スペイン国立サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学哲学部教授) からの翻訳依頼を引き受けたのか、不思議に思うひとがいるかもしれない。ことは単純である。ご本人が豊かな漁場をかかえた本家本元のリアス式海岸の出身で、サンセンショという海辺の町に別荘と船を持っていると話してくれたせいだった。わたしが仕事よりも趣味を優先させたのは、あとにも先にもこのとき限りである。そのために、地ならし用の時間がたっぷり必要だったのだ。

ミルチャ・エリアーデについては、恩師の木村榮一、前神戸市外国語大学学長がよく論文に引用されていたので、そこそこの知識があり、知らず知らずに文献を集めていたという事情も幸いした。でなければ、世界有数の宗教史家が書いた博覧強記の文章についていけるはずがなかった。

既訳の作品を読んだ限りでは、専門用語をしっかり押さえて、エッセイを訳するような文体にすれば、それほど怖がることはないように思えたので、そのつもりで翻訳を始めた。ただし、註だけは手がつけられなかった。あまりにも巨大な深い森に分け入り、迷い子の憂き目にあうのは必至だったのである。

さて、いつものことながら、本文や「あとがき」の校正を進める一方で、遊文舎の西澤直哉

氏とのあいだで装訂の話煮熟めていった。これはあわただしいけれど、まことにスリリングな心優しい作業であった。それもこれも西澤氏の誠実な対応の賜ものだったと言っていい。

今回の表紙カバー図版には、わたしの大学院のクラスの学生だった文学部の高橋まゆみ氏(美術史専攻)が教えてくれた、『七月の暦 時禱書の零葉』(関西大学図書館蔵)という十五世紀フランスの細密画入りの写本を、機会があったら使おうとずいぶん前から決めていた。苺の白い花と赤い実、それにアラベスク模様風の紫色の茎にひらいた花があしらってあり、それが白抜き帯の黒い帯に映えてきれいであった。

帯の文案は縦書きで、「空前絶後の 宗教史家ミルチャ・エリアーデの 中心思想と方法論を余すところなく捉えた、新進気鋭28歳の スペイン人哲学研究者 マルセリーノ・アヒース・ビリャベルデの恐るべき才能をつぶさに伝える 学会デビュー作、本邦初登場」というものであった。じつは、これがわたしのいちばんお気に入りの「訳者自装」本にほかならない。

この本については、エリアーデの『イメージとシンボル』(せりか書房)を訳された和光大学名誉教授、前田耕作氏が、読書新聞〔2013年(平成25年)7月19日(金曜日)]に書評を寄せてくださった。それによると、〈エリアーデの伝記をふくめた最初の本格的な研究書の邦訳は、デイヴィッド・ケイヴの『エリアーデ宗教学の世界』(せりか書房・1996年/原題:新しいヒューマニズムへのミルチャ・エリアーデの視線・1992年)が初めてであった。ケイヴの著作も次の年に刊行されたダニエル・デュビュイッセンもまた「エリアーデと聖なるもの」(『20世紀の神話学—デュメジル/レヴィ・ストロース/エリアーデ』・1993年)を主題としながら、それらより先に刊行されていたアヒース=ビリャベルデの処女作でもある本書(1991年・サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学出版局)にはまったくふれていない。本書の邦訳が刊行されなければ、エリアーデの「中心思想と方法論」の淵源を歴史的に抽出し、その思考の枠組みを緻密かつ包括的に論じた本書を私たちがついに目にすることはなかったかもしれない)。

つまり、これまでの学会の定説とは異なり、マルセリーノ・アヒース・ビリャベルデの『聖なるものをめぐる哲学 ミルチャ・エリアーデ』こそが、デイヴィッド・ケイヴ『エリアーデ宗教学の世界』とダニエル・デュビュイッセン『20世紀の神話学』よりも早く上梓された本格的なエリアーデ研究書であることが判明したのである。そんな画期的なことなどは、わたしが知る由もなかったのは言うまでもない。

拙訳については、前田氏による直接的な言及はなかったけれど、〈本書『聖なるものをめぐる哲学 ミルチャ・エリアーデ』の頁を繰り、訳者平田渡のどこかゆるやかに包み込むような「あとがき」を読みながら、思わずわが国におけるエリアーデ受容の道筋を想い返すこととなった)と述べている。これはまことに微妙な言い回しであって、どう受けとめていいか困ってしまった。

『聖なるものをめぐる哲学 ミルチャ・エリアーデ』は、専門外の内容だったので足掛け10年ほどかかったけれど、装訂に古式ゆかしいフランスの写本を使い、そこに明朝体のほかに好きな宋朝体を織りませた字体を重ねて、思いがけないくらいすがすがしい体裁の本に仕上がった。

去年、出したばかりの⑤のフル・タイトルは、『えも言われぬ美しさの、きらびやかにして、永遠なる サーカス』というのだが、表紙カバーにジョルジュ・ルオーの『マドレーヌ』（おんな道化師）を選んだ。③のアメデオ・モディリアーニの裸婦像を採用したときは、ちょうど姫路市立美術館でモディリアーニ展がひらかれたし、⑤のときも同様、伊丹市立美術館でルオー展が催されるという不思議なめぐりあわせがあった。意思あれば通ずとは、こうしたことを言うのではないだろうか。おまけに、『マドレーヌ』（おんな道化師）は、ルオー作品の収集で知られる東京のパナソニック汐留ミュージアムに所蔵されていたので、掲載許可をえるのも比較的簡単であった。

ルオーの絵画は、周知のとおり、ステンド・グラスの手法から学んだ黒い骨太の線を使った暗い画面を特徴とするが、『マドレーヌ』は、当時も今もめずらしいおんな道化師を描いている点、そして何よりも雰囲気明るいのが貴重である。

⑤の表紙は青色、背文字は金色、そして表紙カバーは青色、帯は黄色にした。これは、昨年元旦にテレビで、ウィーン・フィルのニュー・イヤー・コンサートを見ていたとき、会場の楽友協会大ホール（黄金の間）の天井が映し出され、金色の縁どりがしてある、空色を背景にした絵画が、あまりにもきれいだったので、それを模した装訂にしてみようと思いついた次第である。

⑤は、初めて口絵に4頁にわたる写真を入れた。日本ではまだよく知られていない作者、ラモン・ゴメス＝デ＝ラ＝セルナの執筆中の肖像、『サーカス』の初版本と異本の表紙、パリの常設館メドラーノ・サーカスの外観とヌーヴォー・シルクの内部構造、当時人気を集めたスペイン人道化師ジェロニモ・メドラーノの肖像、それに一斉を風靡したイタリア人道化師フラッテリーニ兄弟の肖像も。

黄色の帯に書いた文案は縦書きで、「サーカスの〈番記者〉を 自認するスペインの 前衛派、ラモンが 描いた悲喜こもごもの サーカス世界」ということにした。また、「ベル・エポックのパリとマドリッドに花開いた サーカス文化の馥郁たる薫りにひたること ができる。読みやすい断章形式」とも喧伝した。

今思えば、高校時代に新聞部で編集のまねごとをやった経験が生きているように思われた。こうした装訂に関することや文案を作ることや、字体を工夫すること、割り付けの仕事をするのが好きなのである。これは生涯直らぬ習性であろう。

本文の校正をしながら、書物の体裁を決めていく両にらみの仕事は大変だけれど、それを許してくれる出版部というか、ひいては大学当局の寛容な姿勢には、ほとほと感心するばかりである。

全国にごまんある大学の中で、一枚の申請書を出すだけで、装訂についてのさまざまな希望を叶えてくれた上で、ハード・カバーで上質紙を使ったきれいな本を上梓してくれる大学がどこにあるだろうか。すまじきものは宮仕えというが、こと本の出版に関しては、関西大学

のように懐が深い大学ならば、宮仕えも悪くないと誰しも思うにちがいない。

歌の翼に乗せて

春の岬旅のをわりの鷗^{かもめ}どり
浮きつつ遠くなりけるかも (三好達治)

岬のはずれに少年は魚釣り
青いすすきの小径を帰るのか (谷村新司詞・曲「いい日旅立ち」)

筑後の流れに小魚^{こぶな}釣りする人の影
川面にあわく浮かんでた
風が吹くたび揺れていた (武田鉄矢詞・山木康世曲「思えば遠くへ来たもんだ」)

岩ばしる垂水の上の早蕨^{さわらび}の 萌え出づる春になりけるかも (志貴皇子)

淡路島かよふ千鳥のなく声に 幾夜寝ざめぬ須磨の関守 (源兼昌)

逢いみてののちにくらぶれば 昔はものを思はざりけり (権中納言敦忠)

流星や夜空のストックキングに走る伝線かな (ラモン・ゴメス=デ=ラ=セルナ詩 拙訳)

行春や息ととのえへて丘のうへ (丸谷オ一)

もろもろの恩かがふりし一生^{ひとよ}かな (田辺聖子)

私の耳は貝のから
海の響をなつかしむ (ジャン・コクトー詩 堀口大學訳)

てふてふが一匹韃^{だつたん}鞆海峡を渡つて行つた (安西冬衛)